

知的障害を伴う自閉症児に対する体験学習

—筑波大学附属久里浜特別支援学校の取組—

筑波大学附属久里浜特別支援学校

副校長 齋藤豊

I. はじめに

2020年3月に始まった新型コロナウイルス感染症対策は、その後、様々な変更を経ながらも教育活動に大きな制限を加えてきた。特に、公共施設を利用したり、物や場を共有したりする体験学習は大きく制限された。筑波大学附属久里浜特別支援学校（以下、久里浜特別支援学校）においても2020年度についてはほとんどの体験学習を中止、もしくは大幅な制限をする形となった。しかし、在籍する幼児児童の特性を考慮し、2021年度からは感染症対策を行いながらも、できる限りの体験学習を行うようにしてきた。そして、2023年度になってからは、コロナ禍以前の活動をほぼ取り戻しつつある。本稿では、久里浜特別支援学校における体験学習の取組とその意義について紹介する。

II. 久里浜特別支援学校について

久里浜特別支援学校は、1973年年9月に重度・重複障害の教育研究校として設置された国立久里浜養護学校を前身とし、2004年4月に国立大学法人筑波大学の附属学校となった。知的障害を伴う自閉症のある子供（以下、知的自閉の子供）のみを教育対象としており、幼稚部と小学部だけの学校である。神奈川県南東部、横須賀市の海沿いに位置し、海と里山に囲まれた環境の中で、幼児児童がのびのびと学んでいる。小学部児童を対象に寄宿舎が併設されていることから、神奈川県外から入学してくる場合もある。知的自閉の子供たちの早期教育に専門的に取り組み、コミュニケーション手段の拡大や獲得、対人関係や興味関心の拡大などを支えている。また、学校生活だけでなく、偏食や外出、睡眠リズムの乱れや医療受診など、家庭が抱える様々な困難に対してもサポートを行っている。



III. 実践紹介

1. 栽培学習・調理学習

久里浜特別支援学校の幼児児童の多くは、少なからず偏食の傾向が見られる。自分の好きな食べ物を決めてしまうと、それ以外を食べないという子供が少なくない。もちろん、その程度は様々ではあるが、特に野菜や見たことのない食材に対して拒否感を示す場合が多い。栽培学習はこのような子供に対する食の広がりを支える活動の一つである。種や苗から植物を育て、それを収穫、調理すること

で、『食べてみよう』と挑戦するきっかけを作りやすくなる。幼稚園、小学部ともにサツマイモや夏野菜を栽培し、収穫体験や調理学習を行っている。右の写真は、小学部4年生がキュウリを栽培、収穫し、マヨネーズをつけて食べているところである。

また、栽培せずとも、調理学習だけでも食べられる食材を広げるきっかけになりやすい。右下の写真は小学部5年生が宿泊学習で行うピザ作りの事前学習を行っている場面である。楽しみにしている活動に関連させて調理を行うことで、前向きに取り組みやすくなる。自分が調理した食材であることをきっかけに食べられるようになる児童は少なくない。

2. 遠足・校外学習

知的自閉の子供の多くは、新しい場所や活動に対して不安を抱きやすい。この不安が外出を妨げることも少なくない。公共交通機関を利用しているときに騒いでしまわないか、知らない場所、人の数や騒音などでパニックになってしまうのではないかと、といった不安を抱えている家庭が多く、家庭での外出が極端に少なくなることもある。こうした不安に対して、小学部では遠足や校外学習を積極的に行っている。身近な場所への外出から始まり、遠くの目的地へとステップアップしていく。外出手段も徒歩、スクールバス、路線バス、電車、船といったように拡大していく。右の画像は、小学部1年生の徒歩遠足の様子である。今年度、3年生は、近場のスーパーへ路線バスを使って出かけ、4学年は、バスと電車を使いより遠くの場所を目的地としていた。最終的に6年生での修学旅行は、公共交通機関を乗り継いで移動することを目指す。それに向けて、6年生は、約40km離れた横浜中心部まで校外学習に行っている（写真右下）。校外学習を行う際には、十分な事前学習を行い、子供たちが不安を感じないようにするとともに、『好きな遊具で遊べる』、『好きなお菓子を買える』、『好きな物を食べられる』など、外出への動機付けをしっかりと行っている。そして、『こういう形で情報を提示すれば外出できる』という方法を家庭に伝えている。校外学習の経験を重ねていく中で、子供たちは公共交通機関の利用方法を少しずつ身に付け、外出に対する不安を減らしていくことになる。

3. 宿泊学習・生活スキルサポート入舎（寄宿舎）

宿泊学習は、学校生活において大きな体験学習の一つである。しかし、知的自閉の子供たちにとっては必ずしも楽しい活動とは限らない。落ち着く自宅（普段通りの場所）ではない所で宿泊することに対する不安は、子供によっては非常に大きなものとなる。したがって、その事前指導や動機付けには、多くの時間を割いている。また、宿泊学習には、入浴や睡眠など、普段の学校生活では関わり



をもちにくい場面の指導を行えるという一面がある。久里浜特別支援学校では、小学部4年生から宿泊学習が始まるが、その前学年までも準備段階、宿泊準備体験を設定している。1年生では夕食作り体験を行い、2年生では夕食作りと入浴体験を行っている。3年生になると夕食、入浴に加えて、花火や掃除など、活動をもう一つ行ってから帰宅する体験となる。右上の写真は、入浴後、お風呂掃除を行う児童の様子である。こうした準備段階を経て、宿泊学習を迎える。宿泊学習はいずれも一泊二日だが、場所が変わっていく。4年生は校内宿泊施設で、5年生は、隣接する三浦市での宿泊となる。6年生の修学旅行は、県西部、約80km離れた箱根が目的地となる。特徴的なのは、宿泊先で体験する事を予め学校で練習してから本番を迎える事である。5年生は、宿泊先であるYMCAでシーカヤックを体験する（写真右下）が、事前に学校プールを使ってシーカヤックに乗る練習を行う。修学旅行で寄木細工を体験するのであれば、これも学校で練習をしてから本番に臨むようにしている。安心できる学校という場所で、宿泊学習で行う体験が楽しいものであると感じたり、やり方を経験したりして、見通しをもって宿泊学習を楽しめるようにしている。



また、宿泊学習とは別に寄宿舍を利用した生活スキルサポート入舎という体験を行っている。これは、現在の課題を明確化する事や、家庭で困っている日常生活動作の獲得などを目的とした体験で、希望者を対象に一人あたり2～3週間を目安として、入舎するものである（右写真）。生活スキルサポート入舎の前には家庭と身に付けたい事について確認を行い、学級担任も交えてサポート方法について相談を行う。また、体験してできるようになった方法を家庭でも行えるように引き継ぐようにしている。



4. 医療受診支援

一般的な体験学習とは異なるが、医療受診のための学習についても触れておく。繰り返しになるが、知的自閉の子供は、新しい場所や活動に対して不安を抱きやすく、病院受診を嫌がる子供が少なくない。校内で行われる各種検診に対しても同様である。そこで、事前に検診の内容や使う器具などについて説明を行う。また、説明だけでなく、実際に使う器具を子供に触らせ、子供の不安感を軽減できるようにしている。右上の写真は小学部2年生が聴診器等を実際に使っている様子である。



また、病院受診の中で最もハードルが高いものの一つが、歯科受診である。久里浜特別支援学校は横須賀市の歯科医師会と連携して、この問題に取り組んでいる。必要に応じて、担任が保護者とともに受診先の歯科医院へ行き、受診手順やその説明方法について相談を行っている。右の写真は歯科医からの提案を受け、保護者がペットボトルで作成した笑気マスクの



模型を付けている様子である。学校では自立活動の時間を使って指導を行っている。この授業では人形を相手に、子供が歯科医役となって、流れを確認することで理解を深めている。

IV. 知的自閉の子供たちに対する体験学習の必要性について

学校は、子供たちの発達の段階や特性などを踏まえ、「知識及び技能」の習得と、「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養という、資質・能力の三つの柱の育成をバランスよく実現できることを求められている。知的自閉の子供たちがこれらの学びを進めるためには、自立活動の目標として掲げられているように、先ずは、個々の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導が土台として必要となる。そして、それらを効果的に行うには体験学習が欠かせない。体験学習を通じて体験的に培われる三つの柱を、机上での学習を含めた更なる学びにつなげていくことが重要だと考えている。

■用語について

自立活動：じりつかつどう 障害がある幼児及び児童（及び生徒）が自立を目指して、教育的な活動を行う日本独自の指導領域。個々の障害の状態に応じて行う個別の指導であり、授業として実施する指導の他に教育活動全体を通して指導を行う。